

【21】

俳人 大高 翔 の世界に触れよう

俳人 大高 翔

俳句の学習では、自分の心に響く俳句を見だし、を読み味わうことが大切である。

また、表現の仕方を工夫して俳句を作り、友達と感想を交流することも、俳句に親しむ効果的な方法として挙げられる。

徳島県出身である大高 翔氏の、日常生活を題材とした俳句を学習することで、生徒は俳句を身近な表現だと認識することができるだろう。また、大高氏の俳句を題材とし、使われている言葉を吟味することによって、ものの見方や感じ方を豊かにするとともに、俳句創作への意欲を喚起することができると考えられる。

1 プロフィール

俳人。1977年生まれ。13歳より作句。執筆を中心に講演や校歌作詞など幅広く活動している。ライフワークとして、子どもたちや初心者への作句指導を行っている。

また、海外でも日本語や日本文化の魅力を伝える活動を展開している。

2009年徳島県立徳島科学技術高等学校、2012年徳島県立鳴門渦潮高等学校の校歌を作詞する。2013年より徳島県阿南市の「阿南ふるさと大使」となる。

2 作品

体育館わたしのひとつが終わった夏
春スキーさしだす君の手が欲しい
ふくらんだかばん明日は始業式
おはようの声がゆきかう更衣
新学期となりの席の恋敵

『ひとりの聖域』 大高 翔 邑書林

すぐそばに明け方のおい夏休み
捨てられるだけ捨てていこう春休み
十九歳秋空に名を刻みたし

『十七文字の孤独』 大高 翔 角川書店

春暁の美しき眠りのつづきかな
秋刀魚焼くいつしか君の妻となり
名を呼んで子を振り向かず花の昼
髪解きて秋思こぼるる洗面器
光りつつ来たるべき恋待つ林檎

『〈キリトリセン〉』 大高 翔 求龍堂

3 著作から見られる俳句への思い

私は、中学一年生くらいから俳句を始めて、最初は難しいなと思いました。難しいからこそできるようになりたいくてやめられなかったんです。十代の多感な時期に俳句が身近にあったので、性格の大部分は俳句が作ってくれたように思います。

「～かもしれない」とうじうじ迷っていると十七音からはみ出すので、自分の感情をある程度断定して表現するクセがつく。それで気持ちや考え方を切り替えて次に進めたような気がします。何が本質かという答えのない問いを続ける十代の頃、俳句にかなり救われたなと思います。俳句がなければ、とめどなく悩んでいる性格だったと思うんですよ。

（「俳句」2015年9月号 KADOKAWA）

漱石さんの俳句と向き合いながら、改めて思ったのは、俳句というものの摩訶不思議、俳句というものは、恐ろしいくらい正直に、詠んだ人の心を映してしまう、ということ。小説にも随筆にも書かず、家族にも友人にも語らなかった、心のなかの密やかな部分でさえ、俳句は知らぬ間に写し取っている。わたしはことばの力を改めて教えられた気がします。ことば、というもののパワー。力あることばは、志あるものに宿る。百年後の誰か、百年前の誰かにも、恥ずかしくない俳句、あるいは生き方というものを、私たち俳人は課せられているのかも。そんなことを意識をさせられて、わたしは、背筋を伸ばします。すると、目の前の景色が、洗い立てのように、少しちがってみえてくるようです。

（「漱石さんの俳句」2006年 実業之日本社）

4 学習指導の実際

【例1】

- （1） 2の大高 翔氏の「作品」からベスト1ないしはベスト3を選ぶ。
- （2） その理由を、俳句の言葉を根拠として書く。
- （3） 書いた根拠をもとに、意見の交流をする。
- （4） 選んだ俳句の鑑賞文を書く。

【例2】

- （1） 一枚の写真（校舎内外の写真や学校行事の写真、光村図書教科書「単元の扉」の季節写真）を見て表現技法を使った俳句を作る。
- （2） 班で、句会を開く。

【例3】

『ゼロから始める俳句入門』（大高 翔）を参考にして、表現技法を学習する。

5 参考文献

『こども俳句塾』 大高 翔 明治書院